

日本文芸研究会 第六三回研究発表大会 研究発表要旨

六月一日(土)
シンポジウム 仏教の誤読」

基調講演

スリランカ上座部仏教長老 アルボムツレ・スマナサーラ

ありのまま 無我 さとり 如来

「日本語とブッダのことば」

光は外から射し込む―仏教の外在性について―

仙台高等専門学校 空井伸一

唯我独尊」といえば今では驕り高ぶりのようにしか聞こえない。しかし、三界に迷えるすべての衆生にとって師たる釈尊にしてみれば、淡々とありのままを語った言葉に過ぎない。そして、そのように釈尊を師と仰ぐなら、つまり仏教徒であるならば、誤読」のしようもない言葉なのだ。しかし興味深いことに、現今では、この世のあらゆる存在は等し並みにかげがえのない存在であるとの宣言、などと解される。これはヒューマニスティックな解釈にも聞こえるが、実はこれほど高慢な「誤読」はないのではあるまいか。

釈尊は不完全な凡夫にとって自身とは似ても似つかぬ完璧な師であり、その意味で外に存在するもの (ekernal) である。だからこそ、そこから放たれる光に導かれて蒙は啓かれ (enlightenment)、不完全な地平を脱すること (解脱) もかなう。師が自分と似たようなものならば、いつまでも同じ地平を堂々巡りすること (輪廻) になるだろう。

日本にとって仏教は「将来」されたもの、外から射し込む光だった。しかし、「唯我独尊」の「誤読」のように、あらゆる存在は尊い、つまり自分自身も内側から光を発して輝くものだと主張する発想へと変じる傾向が認められる。これは日本に限ったことではないのだが、仏教勸奨の立役者

である聖徳太子の方、自己肯定・自己語りの仏教というものが一つの強固な系譜として、良くも悪くも私たちの文化を規定していることについては、今日の危機的状況に照らしても、改めて考えてみてよい。時間が許せば、以下の作品を参照する。「雨月物語」から「白峯」。『平治拾遺物語』巻一の一「道命於和泉式部許詭経五條道祖神聴聞事」。芥川龍之介「道祖問答」。

フアジズム期における日本仏教論とその諸問題

既成仏教集団は、明治初期からすでに国家の動員となっていたが、その関係はアジア他国への領土拡大が開始される二〇世紀転換期において一層、深まることとなった。日本中心的なアジア支配構想の推進は、この列島の仏教者に新たな認識を与え、自己を語り直すように促した。明治末期より、「印度」や「中国」の仏教とは本質的に異なる存在としての「日本仏教」を語る者が徐々に現れていったが、一九三一年の満州事変以降、次第に強まる戦時体制の中で、状況は急進化した。当該期における「団体」論の氾濫に伴って、仏教とナショナルアイデンティティとを連絡する言説も多様化し、「日本仏教」をめぐる認識も新たな段階に達した。しかも、その営為は「宗教」として仏教を実践する思想家のみによるものでなく、その歴史や理念をいわば、「科学的」な立場から究めようとする、当時の帝国大学に在籍した官学者によるものでもあった。本発表では、この時期における「日本仏教」を語る一連の言説に焦点を当て、その諸問題を考察したい。

参考文献

柏原祐和泉 西「昭和國家主義の進展と仏教」 同『日本仏教史 近代』吉川弘文館、一九九〇年、二二二～二五四頁。

末木文美士・辻村志のぶ 第5章「戦争と仏教」 殊に第一節「戦時体制の進展と仏教」 末木文美士・他編『新アジア仏教史』トク・日本 近代國家と仏教』佼成出版社、二〇一一年、二一八～二四九頁)

クラウタウ、オリオン 十五年戦争期における日本仏教論とその構造――

花山信勝と家永三郎を題材として」（『禪教史學研究』第五三卷 第一号、二〇一〇年）

仏教語の変容 宮城学院女子大学 田島 優

「誤読」の定義はむずかしいが、仏教語についていえば、特に専門の立場では、近代における海外留学僧や大学の学問としての仏教の確立により、パーリ語仏典やサンスクリット語学習から漢訳仏典の見直しのみならず、訳語の検討も行われた。日本での仏教は漢訳仏典に基づいている。これらはサンスクリット語などによるものを中国において翻訳し、それをそのまま利用している。大乘仏典には種類も多く、その翻訳の作業において多くの訳者が携わり、それぞれの訳者の考えにより原語に対して異なる訳語が当てられている。また教義上の重要概念などは音写語（仮借）を用いている。例えば奈落はナラカ（地獄のこと）、三昧はサマーデー（不動の境地に至ること）、仏（陀）はブツダ（悟った者）の音写語である。一字二音節の仮借も多く、日本人にはそのまま漢語と受けられやすく、その漢字に意味を見出そうとしてしまう。それに加え、中世や近世の説経の場における特定の語の多用などにより、仏教語が慣用表現化しまた意味に変化が生じ、日常語として使用されるようになる。明治時代になると、仏教が中国において老荘思想の用語を利用したように、意識・観念・知識など教義上の重要語が西洋哲学の用語として利用された。このような仏教語の意味変化や哲学用語化も現代人にとっては仏教に対する誤読の要因となっ

六月十二日（日） 研究発表 午前の部

「源氏物語」御法巻の紫の上―葬送場面の情景描写に注目して―

東北大学 鈴木早苗

『源氏物語』の御法巻において、四十三歳の紫の上は、光源氏と養女明石の中宮との唱和を最後に息をひきとり、茶毘に付された。従来、そ

の死については、遺されて悲嘆にくれる光源氏の側に焦点が当てられることが多い。そんななかで紫の上本人に関しては、その晩年の心情とあわせて、彼女が死してのち救われたかどうかということが論じられてきた。晩年の紫の上は、光源氏に出家を願うものの拒否されることから、「絶望」していたとする見解が示される一方で、拒まれても「達観」していたとする考えもある。そして、紫の上が死後に救われたかという点に関しては、解釈は揺れているものの、多くはその死に救済を読み取っている。

だが、こうした議論がなされる一方で、物語が明記していないことから、救済や往生といったことは「物語の真の関心事ではなかった」とする意見も示されていることは見過ごしがたい。『源氏物語』が、紫の上の最期を語るに際して、彼女が救われたか否かという「真の関心事」としていないのだとしたら、彼女の死や葬送のくだりが語られることとの、紫の上の側における意味はどこに見出せるのだろうか。

本発表では、死を前にした紫の上の心情を改めてたどりなおしたうえで、従来『源氏物語』の受容が指摘されている紫の上葬送場面の情景描写に注目することで、彼女の最期が語られる、その意義を論じたい。

「ありがたき世」を嘆く男たち―『源氏物語』蜻蛉巻の薫の位相―

仙台高等専門学校 久保堅一

浮舟の失踪を受けて始まる蜻蛉巻で、薫はこれまでに関わってきた女君たち―大君・中の君・浮舟を回顧する。巻末部分には宇治の物語を締め括るかのような独詠歌が置かれており、この巻において薫は宇治の物語を統括する男主人公として存在していると言えよう。蜻蛉巻は、物語における薫の位相を見定める上で看過し難い巻と考えられる。

蜻蛉巻で過去の女君たちを回顧する薫の思考には、これまでに「循環」や「円環」といった性質が指摘されており、その把握は実に適切なものであるように思う。だがその反面、薫の思考の推移を平板に見なしてしまい、そのためにこぼれ落ちる部分もまたあるのではないだろうか。本発表では、そのような表現として、巻の後半において「難いものかな、人の心は」あ

りがたの世や」等と、思慮のある理想的な女性がいないと嘆く薫の思念に注目したい。こうしたいわば「ありがたき世」を嘆く男のことは、正篇ではいわゆる「雨夜の品定め」（帚木巻）と女三の宮降嫁以降の紫の上をめぐる物語「若菜上・下巻」とに際立って集中して見出すことができる。発表では、理想の女の「ありがたき」を語る正篇の男たち（主に光源氏）のことが、若菜上・下巻では紫の上の担う苦悩の側から相対化され、空転してしまうことを確認した上で、同様のことが蜻蛉巻の薫の思念に見出せることを、物語の主人公としての薫の位相と関連させて意味づけた。

平安・鎌倉時代軍記物語における権力者の捉え方とその変容

——「諫言」の場面を焦点に——

東北大学高等教育開発推進センター外国人特別研究員

オニスチエンコ・ヴァチエスラヴ

平安・鎌倉初期に成立した軍記物語の『将門記』、『源元物語』、『平治物語』、『平家物語』、『承久記』は「諫言」を語り、「諫言」の場面を必ず含んでいる。

もっとも有名な「諫言」の場面は『平家物語』の「教訓状」の、平重盛が父清盛に、後白河院との対立を止めさせようとしているというシーンであるが、その他の軍記物語にも類似する箇所がある。

『将門記』では将門の舎弟将平と家来伊和員経が将門を諫め、天皇の権力の絶対性を説き、反逆の行為を停止させようとした。『源元物語』にも、内大臣藤原実能が崇徳上皇に同じようなことを言っている。そして『平治物語』、『承久記』にもこのような「諫言」の場面が見られる。

この「諫言」は物語の中でいつも謀反が始まったところに位置しており、諫言者が反逆者の一人に権力者（王者）の権力の絶対性を説明し、「諫言」の成功が不可能であると警告し、反逆者の行為を批判しているという場面である。

このような場面の諫言者の批判的発言には当時の権力の捉えかたが反映され、物語の書かれた時代の歴史観の一部が表されていると考え、本発表

で「諫言」の場面を採りあげて比較し、権力の捉えかたとその変容について考察したいと思う。

研究発表 午後（部）

中江藤樹 『持敬図説』と四書 東北大学大学院 高橋恭寛

中江藤樹（1608～1648）の著作に『持敬図説』というものがある。二重円の内に対象を記した「持敬図」についての解説書である。藤樹はこの書で「天命を畏れる」「徳性を尊ぶ」という「敬」を保持すること「を説いているのだが、これまでの研究では、この「持敬」の構造と、その「持敬」の眼目、という二点以外にはあまり検討されてはこなかった。そのため、この「持敬図」に真蹟と定稿との二種類あることはあまり知られていない。両者の大きな違いは、「持敬図」外側の円に記されている文字である。定稿では、外側の円には「五典・七情・四端」と記されている一方で、真蹟では「正心」を除いた四書『天学』八条目と三綱領の「親民」が記されている。学問の中心が「天学」にあると見る藤樹が、「天学」を用いて「持敬」の構造を語るつもりであったことが窺える。

「持敬図」定稿本「五典・七情・四端」の典拠を探ったとき、それぞれが『論語』・『中庸』・『孟子』に基づくことに気付かされる。ここで「四書合一図説」がほぼ同時期に執筆されていることから、「四書合一」という構想が真蹟本から定稿本への修正に影響したと考えられる。江戸初期にあって既に『四書大全』を通読していた藤樹が儒学を語る際に、「四書」をどのように受容したのか、という模索を見出すことが出来るのではないだろうか。

文学的内容の形式（「 $5+1+1$ 」とは何か？）——夏目漱石『天学論』の冒頭をめぐる—— 東北大学大学院 戸浦豊和

夏目漱石『天学論』大倉書店、明治40年9月）の研究における課題の一つとして、「冒頭の「公式」の由来とその意義の追求を挙げることができらるだろう。漱石は『天学論』冒頭において文学の定義として次のように記

す。凡そ文学的内容の形式は(F+f)なることを要す。Fは焦点的印象または観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。現在までの研究では、(F+f)の公式の源泉として、フランスの心理学者テオデュール・リボア(Theodule Ribot, 1839-1916)の学説などとの関わりが指摘されている。しかし、漱石は(F+f)の公式をあくまでも「文学的内容の形式」として提示しており、その定式化の背景には当然、漱石の文学概念が存在する。そこで特に注目したいのは『異文学形式論』皆川真禧編、岩波書店、大正13年9月)で展開される文学の定義を巡る漱石の議論との関わりである。漱石は『文学論』の前哨をなす『異文学形式論』において、文学の定義が多様に並立する状況に言及し、文学に定義を与えることの困難性を指摘しつつも、最終的には英国の聖職者・文学者であるストップフォード・ブルック(Stopford Brooke, 1832-1916)による「文学の形式は読者に快感を与えるやうに排列した言葉である」という定義を参照する。本発表ではこのようなブルックによる文学の定義を「つの手掛かりとして、特に19世紀から20世紀初頭の英国における文学概念の広がり」と、『文学論』冒頭で示された漱石による文学の公式との関係性について検証し、「(F+f)」の由来と意義について考察したい。

品詞構成の変動が文章に与える影響について—多変量解析による要素の抽出を通じた分析—
東北大学大学院 鯨井綾希

現代日本語に関する大規模コーパスである「現代日本語書き言葉均衡コーパス」に収められた文章群を用いて、名詞・代名詞・動詞・形容詞・形状詞・形容動詞語幹)・連体詞・副詞・接続詞・助動詞・格助詞・終助詞・接続助詞という12の品詞の使用率を計算し、多変量解析の一つである主成分分析を行うことで、各品詞の使用率の増減が文章構成にどのような影響を与えているのかを検討した。その結果、品詞構成の変動が与える文章への影響には、影響力が大きな順に①「客観描写か主観描写か」②「改まった文体かくだけた文体か」③「文脈に依存するかしないか」④「装飾的な表現か簡潔な表現か」の四つがあることを明らかにした。また、①は主として名詞が客観描写に寄与し、代名詞や副詞、動詞・形容詞といった品

詞が主観描写に寄与していた。②は主として格助詞が改まった文体へ寄与し、終助詞や形状詞がくだけた文体へ寄与していた。③は連体詞が文脈依存度を高めることに寄与している一方で、接続詞が文脈からの自立性の増加に寄与していた。④は形状詞や形容詞などが文章の装飾に寄与し、接続詞や動詞が文章の簡潔性に寄与していることが明らかになった。